

■ 新潟市教育フォーラム 2012

基調講演 『『知の地域づくり』と子どもの読書環境』 片山善博氏

日時：平成 24 年 6 月 1 日（金）午後 1 時 30 分から

会場：新潟市民プラザ

（司 会）

大変お待たせいたしました。本日は、新潟市教育フォーラム 2012「読書が育む子どもの未来～家庭・学校・地域で～」にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。定刻になりましたので、これより始めさせていただきます。

本日、司会を務めさせていただきます、ほんぽーと新潟市立中央図書館の松田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに新潟市長篠田昭が皆様にご挨拶を申し上げます。

（篠田市長）

皆さんこんにちは。本日は新潟市教育フォーラム「読書が育む子どもの未来」に本当に大勢のかたからお出でいただきまして、誠にありがとうございます。

新潟市では、政令指定都市になると同時に教職員の人事権がくるわけでございますので、その人事権をフルに活用するために新潟市はどういう教育を目指すのかという方向性を明確にした「新潟市教育ビジョン」というものを市民の皆様、有識者の皆様とともに定めさせていただきました。

簡単に言えば、「新潟は学校が地域に開かれて、地域から支援される。そんな学校づくりを目指す」ということでございます。「学・社・民の融合」という面倒くさい言い方もしておりますけれども、この教育ビジョンがしっかりと遂行されるように、毎年教育フォーラムを実践してさまざまな角度から意識を高め、また検証するということをやってまいりました。

平成 22 年の 3 月、新潟市は「子ども読書活動推進計画」というものを作らせていただきました。今、子どもが本当に本を読まない、これを何とか本に親しんでもらう。そして、子どもたちが本をとおして成長するというシステム、サイクルを回していきたいということで計画を作らせていただきました。

例えばブックスタートという形で、絵本に赤ちゃんのときから絵本に触れていただくという習慣づけを行っていく。一方では、学校図書館。新潟市は旧新潟市のときからそうなのですが、全小中学校に学校司書が配置されているという、我々はもう当たり前だと思っているのですが、全国でいうと大変珍しいことを先輩たちがやってくれていた。これを合併地域にも

全部広げて、170の全小・中学校に学校司書が配置されている。

また、教育ビジョンに基づきまして、150を超す小・中学校に地域教育コーディネーターという学校と地域をつなぐコーディネーターも配置をさせていただいております。そういう活動の中で、例えば地域のコミュニティ協議会が、週何回は夕飯のときテレビを消して子どもたちの団らん家族の団らんに充てましょうという活動をやっていたり、朝読書を奨励しようということでボランティアのかたから頑張っていたり、さまざまな活動が始まっております。しかし、まだまだ濃淡があることは間違いないことですので、さらに子どもたちが本に触れ、そして成長していく。そんな新潟市にしていきたいということで、今回このテーマを採用させていただきました。

第1部では基調講演。片山善博さんは前の総務大臣、また慶應大学の教授ということでございますが、もうテレビでもお馴染みの片山さんから来ていただきました。「『知の地域づくり』と子どもの読書環境」というテーマでお話をいただきます。片山さんは総務大臣のときに、「住民生活に光を注ぐ交付金」により、住民にとって本当にいいことを交付金制度でやろうということに学校図書の実充ということも盛り込んでいただきました。これが今、文部科学省あるいは総務省などで、やはり学校の図書は大事だということで充実を図る施策が行われております。新潟市もこれを活用させていただいているということで、片山前大臣には大変感謝している次第でございます。

そして、第2部には、さまざまな分野で実践活動をいただいているかたから報告をいただき、また新潟大学の足立先生にも加わっていただくパネルディスカッションに片山前大臣にも参加いただくという、大変長丁場の設定になっております。

ぜひ、皆様から最後までご熱心にご参加いただいて、新潟の子どもたちが本と共に成長していくという姿をより確かなものにしていきたいと思っております。市長としての挨拶にさせていただきますが、あとで私も司会役でまた登場いたしますので、そのときまた皆様とお会いさせていただきます。本日は、誠にありがとうございました。

(司 会)

本日のスケジュールをご案内いたします。第1部の基調講演のあと15分間の休憩をはさみ、午後2時50分から第2部の実践発表・パネルディスカッションを行い、終了は4時30分の予定です。

それでは、早速第1部の基調講演に入ります。講師は片山善博さんです。片山善博さんは、鳥取県知事、総務大臣を経て、現在慶應義塾大学法学部教授としてご活躍されています。詳しいプロフィールにつきましては、お手元のプログラムをご覧ください。演題は「『知の地域づくり』と子どもの読書環境」です。

大変お待たせいたしました。片山善博さん、よろしく願いいたします。皆様、大きな拍手でお迎えください。

(片 山)

みなさん、こんにちは。今、ご紹介いただきました片山であります。今日は、この新潟市の皆さんの前で話をさせていただく機会を与えていただきまして、本当にありがとうございます。

私は、もともと自治省という役所に勤務をしております、そのあと鳥取県の知事をやったりのすけれども、元来が地方自治というものをライフワークにしております。日本の民主主義を全国の津々浦々、草の根で支える地方自治というものに、私はずっと取り組んでまいりました。ただ、一方で今日のテーマであります読書でありますとか、特に図書館でありますとか、それは公共図書館であったり学校図書館であったりしますけれども、この分野での充実についても大変関心がありまして、以前からいろいろなかたのところでは図書館などについての話もする機会を多くもっております。

それはなぜかといいますと、いくつか理由があるのですけれども、一つは私自身が図書館に非常にお世話になったということでもあります。これは私的な面です。私自身が子どものときには、私は鳥取県の知事をやりましたけれども、生まれは岡山県になりまして、岡山県でも田舎でありました。今はこの新潟市と一緒に岡山市は政令指定都市になりまして、政令指定都市になるときに編入合併をさせられたというか、しまして、岡山市の一番辺境でイノシシの出る所でもありますから、ここがどうして政令指定都市になったのだろうかと思うような所なのですが、私が子どものときに図書館なんていうのはありませんでした。もちろん、学校図書館はありましたけれども、公共図書館はありませんでした。ですから、子どものときには図書館環境というものは恵まれておりませんでした。

ただ、社会に出て結婚して子どもが生まれて、子どもが6人。私が生んだわけではありませんけれども生み育てまして、その過程で図書館には本当にお世話になりました。子どもを日曜日なんかは連れて行って自分自身が本を読むとか、好きな本を借りるということもありますし、何よりも子どもたちを図書館に連れていくことによって、知らず知らずのうちに子どもが本を好きになるということを自分でも体験したものですから、本当に図書館というのはありがたいものだと思いました。

ただ、そのときに私も転勤族でありましたから、いろいろな所に行くのですけれども、図書館環境が随分地域によって違うということを実感いたしました。一つの所にずっといると、「まあ、こんなものだろうな」と思うのですけれども、いくつか転々としまして、非常に図書館環境の優れたまち、それから、そうでないまちというのがよく分かります。

もちろんどちらがいいかという図書館環境のいいところに越したことはないわけで、ぜひ全国の多くの自治体で図書館環境を今よりももっと良くして欲しいなということを自分の生活、子育ての途中の生活を通じて思っていたものですから、そういう体験もお話しながら、ぜひ自治体の皆さん、これは私のライフワークである地方自治、それをそれぞれ地域で担っている自治体の皆さんにぜひ図書館を良くしてくださいという話をするというのが一つであります。

先ほど言いましたように、私はかつて役人をやっております、自治省というところで最近非常に評判の悪い官僚というものをやっていたのですけれども、だんだんと組織の中で管理職になっていきますと、採用面接なんていうのをやることがあるのです。そのときに、私なんかはどうしても関心があるものですから、「この人、本を読んでいるかな？」ということが気になるのですね。あんまり立ち入ったことを面接のときに聞くのもいけませんけれども、それとなく「この人はちゃんと本を読んできた人かな、そうでない人かな」というのを把握するようにするのですが、最近は残念ながら本を読んでいるなどと思う人は少ないのです。いろいろな話はよくできるのですけれども、どうもやっぱりこの人はあんまり本を読んでいないというのが分かります。

国の政府の中で、政策をいろいろ考えなければいけない。もちろん最後は政治家が決めるわけですが、政策の案というものは官僚たちが日々考えるわけですが、その官僚たちが本を読まなくなっている。もちろんみんなではありませんけれども、我々が官僚になったときの周りの人たちを見ていて、それから比較的最近の若い人たちを見ていて、やっぱり随分違うなという気がしまして、これではいけないなとつくづく思います。ぜひ小さいときからやはり本を読む習慣を身に付けて、それで社会に出ていくということが私なんかは非常に大切だと思います。自分自身を振り返ってもそうだし、自分の子どもを見てもそうですし、今の若い人たちを見てもそうなのです。そんなことで、どうやって子どもときから読書習慣というものを身に付けるか。読書を通じて自分自身を高めていく。読書を通じて人生の喜びを知る。そういう読書の持っている意味というものを体得してもらうにはどうすればいいのか。こんなことをやっぱり考えるわけです。そうしますと、やはりいろいろな自治体のかた、それからいろいろな地域の皆さんがたに自分自身の体験とか、自分の考え方をお伝えして一人でも多くの子どもたちに本好きになってもらうということを始めのが大切かなと思って、もう随分前から図書館のことを一生懸命やっている次第であります。

幸い1999年に縁があって鳥取県で知事になりました。本当は選挙などということはやりたくなかったのですが、人生というものはなかなか自分の思ったとおりにならないものであります、いろいろな事情があつてとにかく選挙に出ることになったものですから、その

ときに鳥取県の知事になったら、さて何をやってやろうかと。もちろん落ちてしまえばそれまでですけども、幸いに当選すればどういふことをやろうかといろいろ考えたのですが、そのときにいい機会だからぜひこれは自分の手で鳥取県の図書館環境というものをぜひ良くしていきたい。それまで永年あそこの図書館はこうだったこの図書館はどうだったと、いろいろ考えていたこともあるものですから、今度はまちの図書館というよりは鳥取県全体の図書館環境というものを良くするにはどうすればいいのかというのが、一つの大きな私自身の政策課題にしたわけですね。

いろいろなことができました。鳥取県立図書館の人といろいろな機会に話をする、意見交換をする機会を持ちまして、時折司書さんたちと飲み会をやっていました。直接現場で司書をやっている人と話をするとう本当に利用者としてでは分からないこととか、一人の行政の長として分からないことが随分分かるものですから非常に有意義でした。打てば響くと言いますけれども、こちらが「こういうこともしたらいいのではないかな」と思っているようなことをどんどん先取りしてやってくれましたし、私自身気が付かないようなことを司書の皆さんがたが率先して考えて、「今度こういうようなことをしたいのですが」ということを提案してくれたりしまして、気が付いたら鳥取県立図書館というのは、自分で言うのも変ですけども、大変立派な仕事をしてくれるようになりました。

8年間知事をやりまして、本当にいろいろなことをやったという自分でも自負があるのですが、図書館環境をなにがしか良くしたというのが私の一つの知事をやった懐かしい思い出でありました。今日、私がここにこんなネクタイをしてきたのですが、実はこれは皆さんの所からは見えないと思いますが、柄は本でありまして、これは私が知事を辞めるときに鳥取県立図書館の司書の皆さんがたと一緒にあって送別のプレゼントがありますというのでもらったネクタイなものですから、大切に使いながら今日のようなときには必ずしめて本の話をする、図書館の話をするということにしている次第であります。

## 「知の地域づくり」と知的立国

ちょっと長々と前置きをお話しましたが、今日は『「知の地域づくり」と子どもたちの読書環境』ということでお話を申し上げたいと思います。

私は鳥取県の知事になりましたときにいろいろなことをやろうと思ったのですが、その中の一つの大きなテーマが「知の地域づくり」ということであります。これは最近いろいろな所で使われるようになりまして、だんだんと活字なんかにもなったりしているのですが、実は造語で、作ったのは私なのです。鳥取県の政策として「知の地域づくり」というのを始めたので

すね。

それはどういうことかといいますと、これからの将来を考えたときに、どういう県の在り方がいいのだろうかということを考えたわけです。これは、国の場合も、国としてこれからどういう方向に進んでいくかというのは国是（こくぜ）というのがあります。是というのは是認の是、是非の是です。国の進むべき大筋という言葉なのでしょうか。例えば、明治維新のときの新しい明治の国家になったときの国是は富国強兵。善し悪しは別にして富国強兵、欧米先進列強に追い付き追い越せということがたぶん国是だったと思います。それが挫折をしました。挫折というか大失敗しました。1940年代、戦争に突入をして大失敗しました。国が本当に壊れてしまったわけですね。それで、1945年から新しい国づくりを始めたわけです。そのときの国是は平和で民主主義の国家ということだったと思います。その後、高度経済成長などのときには、経済面で世界の最先進国になろうと、みんな思ったかどうか分かりませんが、たぶんそういう国是だったと思いますね。

そういうふうに、国にも国是があります。県にも将来どういう県でありたいかというのが県是（けんぜ）というのは、あまり言いませんけれども、本来、県是というのがあって然るべきなのです。昔はありました。戦前なんかは県是というのをそれぞれの県ごとにつくっていました。大正時代には郡というのがあったのです。国があって県があって、その中に郡があって、今でも郡はありますけれども、今の郡は手紙を書くときに住所に書くだけですけれども、当時は郡庁というお役所があって、郡役所があったわけですね。知事や市長と同じように郡長というのもいたのです。だから、郡にも我が郡の将来像というのを描いて郡是（ぐんぜ）というのをつくっていたのです。その中で、うちの郡は今風に言うとアパレル産業でいこうというのを京都のほうのある郡が決めて、そこから起こった企業が今、女性のかたには馴染みの深い会社がありますけれども、あの名前はもともと国是、県是、郡是という、そういうところから出てきたのです。

話を戻しますが、鳥取県の県是というので何にしようかと。鳥取県の産業構造というのは非常に脆弱でありまして、特徴はいくつかあるのですけれども、一つは公共事業が非常に盛んである。公共事業で多くの従業員を養っているといいますか、公共事業で食っている人が多かったのです。もちろん公共事業も非常に重要です。ですけども私なんかが見たら過剰にやっている。しかもそれはいつも自転車操業みたいになるのです。補助金がきて事業をやって、それで継続できる。政府の方針が変わって財政の方針が変わって、補助金が出なくなったら途端に公共事業のマーケットなんかはぐんと縮小するわけです。

これではいつも中央に従属をして、さっき言った自転車操業を強いられるわけで、やはり産業構造を変えなければいけない。下請けが非常に盛んですが、下請けは利が薄いのです。さっ

きの郡是ではありませんけれども、女性の高級下着なんかを鳥取県は随分作っているのですけれども、それは布から最終製品まで作っていて、例えば女性の高級下着で東京の銀座なんかで売っているので1着2万円。最終価格が2万円なんていうのがあるわけですがけれども、それを作っている工場に行って全工程を見せてもらって、そこの社長さんに「これ、最終価格は？」と聞いたら、「だいたい2万円くらいで売られているようです」と。「いくらこれでお宅の会社に入るのですか？」と言ったら、「これを納入して1着800円です」というような、非常に残念な状況なのです。

それはなぜかという、例えば製品企画とかデザインとかマーケティングとか、そういうところが付加価値が高くて、そういうものは東京などの大都会に全部あるわけで、作る作業工程というのはそんなに単純ではないのですけど、単純労働と言われて非常に利幅が少ない。そういうのが鳥取県の産業構造の特徴でありまして、これをやはり変えなければいけない。ではどういうふうに変えるのかという、知的な部分を産業構造の中で増やして地元の取り分をもっと今よりも大きくするということが、やはり重要になってくる。そうすると例えば鳥取県のアパレル産業で言えば、商品企画とかデザインとか研究開発とかマーケティングとか自社ブランド化とか、そういう分野をもっと力を高めていこうということになるわけです。

そのためには例えば科学技術。巨大科学技術ではありませんけれども、技術とか技術力とか、それから単純作業だけではなくて、例えば知的財産のようなものが加味されるような、そういう産業にもっとシフトをしたいということで、鳥取県のこれからの地域づくりとして一つはやはり科学技術というものをもっと重視しましょうということを提唱したわけです。

もう一つは、「花より団子」という言葉がありますけれども、どうしても経済的にそんなに恵まれていない土地柄ですから、なかなか余裕がなくて、文化芸術を親しむということにあまり重きを置かないという面がありまして、私などは自分自身が美術に親しんだり音楽を聴いたり、それからいろいろな芸術を鑑賞したりということが好きなものですから、自分自身のためもある、この鳥取県という所でもっともっと文化芸術に日常的に親しめて心が豊かになるような土地柄にしたいなと思って、文化芸術をもっと振興させましょう。その担い手も、その消費者と言うと語弊があるかもしれませんが、それを楽しむという、それで支えるという人たちをもっと増やしたいということで、文化芸術の振興ということも一つの目標に掲げました。

科学技術とか文化芸術。こういうものを高めるということが「知の地域づくり」ということになるわけです。そのためには人材が必要です。いずれも科学技術も文化芸術も担っていくのは「人」でありますから、その「人」をきちんと育てるには何が重要かということと教育になるわけです。

私は知事を8年間やりまして、「片山知事さんは県の行政の中で何が一番重要だと思いますか?」とよく聞かれました。もう迷わず「教育だ」と私は答えました。今でもそう思います。今でもそれは間違っていなかったと思います。もちろんいろいろな分野も重要です。福祉も重要だし、それから最近、民主党政権になって「コンクリートから人へ」とか言って、あまり以前ほどもてはやされなくなりましたが、公共事業。これも重要です。やはり鳥取県でも公共事業は重要で、当時、県庁所在都市に高速道路が無い唯一の県だったのです。新潟県なんかは早い頃から歴史的な由来もあって高速道路なんかは非常に盛んであって、羨ましかったのですが、鳥取県は鳥取市に高速道路が通っていなかったのです。もちろん県内全然無かったわけではなく、県庁所在都市に無かったのです。

これは非常にハンディでありまして、大阪なんかから観光客が来るときに、やはり時間がかかりますから、そのハンディキャップを克服するためには、そんなに長い距離ではないのですが、やはり鳥取市から中国縦貫自動車道という既存の高速道路にタッチするほんの100キロくらいですけど、それがもう非常に重要でした。だからそういうことを訴えていました。

私なんかはよく改革派の知事と言われて、公共事業を減らしたと言われて、減らしたのですけれども、大事なものはきちんとやるべく主張もしたし、お願いもしていました。鳥取県は県庁所在都市に高速道路が通っていない全国で唯一の県なので、早くこういうことは解消したいと東京で言ったら、「そういうユニークな県はいつまでもずっと残したらいいのではないのですか」と言われたりして、非常に腹立たしかったことがありますけれども、やっと開通するようになったのですけれども、ともあれ、そういう高速道路も非常に重要です。重要な所は重要です。県行政というのは、いろいろな重要なことがありますけれども、でもわけてもやはり教育が非常に重要だというのが私の当時の考えでもあるし、今も考えでもあります。

## 読書の大切さと「知の地域づくり」

人をきちんと育てる。その人たちが社会に出て自己実現をする。教育の成果を踏まえて自己実現をする。自分で自分の人生を豊かにしていく。併せて、自分の持っている能力とか見識とか実践する力でもって、社会に大きく貢献していく。人々のために貢献をするという、私はこれがこれからの社会の在り方だろうと思います。教育が何よりも重要であります。その人づくりの中で、学校教育もありますし、それから生涯教育と言って、生まれてからお年寄りになっても教育というのはあるわけですが、いろいろな分野がありますけれども、その中で学校教育はもちろん重要です。ことのほか重要です。併せてもう一つ重要なのが図書館だろうと思います。

それはなぜかという、やっぱり読書というものが教育の基礎にあると私は思います。もちろん、教育は読書だけではありません。人の話を聞いたり、自分で思索をしたり、いろいろな分野があって、それで自分を高めていくわけですけれども、やっぱり読書というのが非常に重要だと思います。

レジュメに、「読解力と読書」ということを書いていますが、最近非常に気になりますのが、読解力というものが日本はかなり低下してきているのです。OECDが主要先進国の子どもたち、同じ年齢の子どもたちを3年ごとに共通の試験問題で調査をしているのですね。その中で、科学的リテラシーという分野と、数学的リテラシーというものもありますし、もう一つが読解力リテラシーというのがあるのですね。この読解力リテラシーというのは、どんどん下がってきているという結果が出ています。

これは、大変私なんかは気になりまして、読解力とは何かというと、これは本を読み解く力と思うのですが、実は必ずしもそうではなくて、本であっても新聞なんかの情報であっても、いろいろな情報、それから人から聞いた話も含めて、それを自分の頭の中で統合して総合化して、そこから自分なりのアイデアとか考え方とかいうものを出していく、作り出していくというプロセスを読解力リテラシーといわけです。これが下がってきているということは、どういうことかということ、単に本を読む力が落ちているということだけではなくて、ものを考える力、必要な資料、情報を仕入れてものを考えて新しいものを生み出していくという力が落ちてきているということなのです。ですからそれは教科で言うと国語だけの問題ではなくて、それこそ科学技術の問題であったり、文化芸術であったりもするわけですね。そういう全体の知的分野の基礎の部分。基礎工事の部分が落ちてきているというのがありまして、これは非常に由々しいことだと思っているのです。

では、それを何で高めるのかというのは、これはいろいろあるのですが、やっぱりそうは言っても基礎は読書だと思います。本を読む力。本を読んで必要な知識を吸収する。自分の知らないことを吸収する。そして考える。そして自分の考えを打ち出していくという基礎はやっぱり読書ですね。だから読書を重視しなければいけないと最近つくづく思います。もちろん読書はそういう読解力リテラシーより前に、そこにも情操と書いていますけれど、やっぱり小さい子どもたちが本を読んで本当に心を豊かにしていく、感情を子どもながらに揺さぶられる。感動したり感銘を受けたりするという体験を小さいときに積んでおくということは非常に重要だと私は思います。自分自身もそういう体験がありますし、さっき言いましたように子ども6人も育てますと、やっぱりその過程で結構私も本を読み聞かせたりしました。本当に子どもたちはそれを喜んでいました。

忙しいときや疲れているときには、面倒くさいなと思ったことも正直あります。ありますけ

れども、子どもが本当にあんなに喜んでくれるなら、やっぱり読んでやろうと思って絵本を買い込んできて、順次読んでやったりしました。私のほうが先に寝ることも多かったですけれども、でも今となっては本当に楽しい思い出でありますし、もう子どももみんな成人しましたけれども、よく一緒に集まって食事をしたりするときに、「お父さんに本を読んでもらったよね」という話を聞くと、「ああ、そういうこともあったな」と。「『ノンタン』を読んでくれたよね」とか、何か最近『ノンタン』ってあんまり評判よくないのだそうですけれども、そんなことはないと思いますのですけれどもね。最近孫に絵本を買ってあげたりしています。私も孫が4人いまして、そのうち2人は長男のところは双子なのですが、その長男の嫁さんは新潟県の人で長野に住んでいる。新潟県の津南町という雪のすごく多い所の人と結婚したものですから、私の孫の半分は新潟県の血が入っているのです。その子とか、あと孫娘が2人いるのですけれども、その子によく本を買ってあげたりするのですけれども、やはり、きちんといい本を選んで、いい本を読んであげることが大事ですね。

つい先だっては、私自身が読んでいいなと思った、あまんきみこさんという作家がおられますけれども、そのかたが書いた本で『天の町やなぎ通り』という絵本が私は大好きなのですが、この本を読んであげると、孫娘が泣くのです。読んでいるほうも涙ぐんだりもするのですけれども、そんな本を読んであげたときに、ああやっぱり小さいこういうときに幼児のときに、いい本を読み聞かせて、それがどれほど将来まで彼女の心の中、頭の中に残っているか分かりませんが、でも実際に今のこの小さいときに、こういう感動を受けた、感銘を受けたというのは、やはりなにがしかの財産として残るのではないかなと思います。そういう意味で情操ということを私は大切にしたいと思っています。

レジュメに「読書習慣と教養」と書いていますけど、やっぱり読書習慣が教養をうむと思います。私は今、大学で学生たちを教えるのですけれども、はっきり言って昔に比べると本を読む力が落ちていると思います。昔、自分自身が大学に入ったときは読書会なんかやっていました。友だちと会ったときに喫茶店でコーヒーを飲むにしても、そういうときでも、「最近何読んだ？」とか本のことを話題にしていました。友だちが小難しい本を読んでいるのに自分が読んでいなかったら、何か肩身が狭い、恥ずかしいようなそんな思いに駆られたものでありますけれども、最近必ずしもそうでもなくて、あんまり読書に対するこだわりもないような気がします。

私はゼミをやっていて、いろいろなことを学生たちにやってもらいますが、一つはきちんと本を読んで、その本からいろいろなものを吸収したり、それから何よりも本を読んで楽しむ。日々楽しむという読書の楽しみというものを覚えてもらうというのを一つの目標にしているのです。それはそれでいいのですけれど、これって本当は中学校とかの先生の仕事ではない

かなと思いつつも、でもなかなか現実はそうならないので一生懸命やっています。それなりに成果が出ます。遅いことはありませんね。学生たちが「先生、本読むのが楽しくなりました」と。「最初は読め読め言われて面倒くさいなと思ったのだけど、最近本当に楽しくなりました」と言ってくれるのが嬉しいのですけれども、これも本当は中学校の教師の喜びではないかなと思ったりもするのですが、いずれにしてもやはり教養というものが重要です。

最近、政治への信頼が無くなったと言われます。私もそう思います。政治への信頼が無くなったというか、政治家への信頼がどんどん低下しています。なぜかという、一つには深い教養ということがあんまり感じられなくなってしまった。政治家の話聞いても。

じゃあ昔、そういう深い教養を感じさせられる政治家が大勢いたかということ、どうかなという面もありますけれども、でも今よりは多かつたのではないかな。最近も、饒舌多弁な政治家は多いですけども、「うーん、この人本当に深い教養があるな」ということを接して感じさせられる人は滅多にいない。中曽根康弘さんという人がいまして、縁あって以前からときどき、警咳に接することがあるのですけれども、この人は「ああ、よく本を読んでおられるな」という印象を私なんかは受けますけれども、最近の特に若い政治家をみたときに、あんまり本を読んでいることはない。能ある鷹は爪を隠すで、こっそり毎晩読書に励んでいる人がひょっとしたらいるかもしれないけれども、そういう人がいたら、何となくじわーっと滲み出て伝わるのだらうなと思います。なかなかそういうことが感じられないのは、やはり読書の習慣がご多分に漏れず落ちているのではないかなと思います。やはり、特に政治家なんかは深い教養があって、強権を発動するとか多弁を弄するとか金満の力で人を屈服させるとか、そういうことではなくて、教養で信頼感を得て、そうするとお金も権力も言葉もそんなに要らないのです。人々は従ってくれるのですね。

今、本当に重要なことが決まらないとか、いろいろなことが言われていますけれども、それはやっぱり政治家の教養が落ちているからではないかなと、ちょっと失礼ながら私なんかは思いますけれども、それは取りも直さず読書の習慣というものがかなり低下しているということが遠因ではないかと思っております。

## 子どもたちと読書環境

子どもたちの読書環境でありますけれども、さっき市長さんのお話にもありましたけれども、家庭、学校、地域、いろいろな所で子どもたちが本に親しむ、本を通じて喜びを感じるという機会、体験を与えることが重要だろうと思います。

最近、教育のことになるとすぐ学校、学校という話になるのですが、学校ももちろん重要

ですけれども、家庭も私は重要だと思います。自分のことを振り返りましても、私は大変両親に感謝しているのですけれども、私の両親はどちらも教員でした。父親は中学校の教員で、母親は小学校の教員でした。母親は早いうちに辞めました。子育てに専念をするということで。

当時、さっき言いましたように、その頃の読書環境は非常に悪かったです。田舎のことですから。ですけれども、父親がよく本を買ってきてくれました。父親は教員でしたから、勤務先の所のまちで本を買ってきてくれて、それがすごく楽しかったです。父親が本を買ってきてくれるのを心待ちにしていました。もしあどきに父親があまり読書に関心がなくて、本を買ってくれなかったら自分も本好きになったかどうかというのは、よく分かりません。近所に図書館も本屋さんありませんでしたから。そういう田舎でしたから。でも父親が本当によく本を買ってきてくれました。私は2つ上の兄がいるのですけれども、この兄も本が好きでして、奪い合いになるのですけど、兄のほうが力は強いし体が大きいから、いつも私は負けて、いつも兄が読んだあと読まされるという悔しい思いをさせられました。たまには弟から先に読ませてもらってもいいのになと思ったのですけれども、いつも兄のほうが自分のほうからということでありました。1年生と3年生になると私のほうが小学校で先に帰りますから、悔しいから、先に帰って、昨夜父親が買ってきてくれてまだ兄が読まないで机の上に置いているのを、兄貴が帰る前にさっと読んでしまおうというので、それが私の読書習慣にとっては非常にいい影響を与えたのだらうと思いますけれども、兄貴が帰ったときにはもう全部読み終えていて、兄が読もうとするときには全部あらすじをこっちがしゃべって、こういう歪んだ喜びを持っていました（笑）。それでよく兄弟げんかになって殴ったり殴られたりしたのですけれども、そんなことで読書習慣というのが知らず知らずのうちに身に付いたのかなと思います。

ですから、父親と母親とそれから私に速読の術を強いてくれた兄に（笑）、今となっては感謝をしているのですけど、今はテレビがあって携帯があって、いろいろな電子機器があってなかなか読書に専念できない。みんなが立派なお父さんお母さんになって、子どもたちに読書、読書と言っても、息が詰まって多分長続きしないかもしれません。ですから、今よりもちょっとでいいです。皆さんのご家庭でも、今よりもちょっとでも子どもたちが本に親しむような環境を作っていただいたら、全体としてはものすごく底上げになると思うのです。これをぜひやっていただきたいと思います。

鳥取県知事時代に県庁の若手の職員なんかとよく飲みに行って、「あなたがた日曜日に何をしているの？」と聞いたら、「うーん、パチンコかジャスコですかね」と言う。「だめだそんなのは、図書館に行け」と言って、よく私は職員に発破掛けていたのですけれどもね。日曜日にパチンコも量販店もいいのですけれども、必要があったら行かれたらいいのですけど、その中に図書館も候補に加えてもらって、子どもをそこに連れて行くということもあってもいいのではな

いかと思います。

日々の授業、学校の教育は重要です。日々の授業と読書を結び付ける。これも重要です。どうも最近の傾向として、特に都市部の傾向として、どうしても進学校でいい学校へ入れようになると、効率的にいいテストの点数、結果をいかに出すかということに専念しますと、読書なんかやっている暇がない。読書なんかやっていると回り道で、本なんか読んでいい点数に結び付かないという傾向があります。特に私も大都会で子育てをして、子どもを通じて学校の教育現場の環境を見てきましたけれども、特に進学を控えると読書というのは邪魔つけにされるという傾向がありますけれども、それではいけないと思うのです。

ですから、これは試験のやり方なんかも本当はもっと私は考えなければいけないと思うのです。全国统一で大学の入学試験をやっていますけれども、あれが本当にいいのかどうか。私が今いる慶應大学もセンター試験を数年前までやっていましたが、慶應大学ではもうそれをやめました。それはともあれ、試験のやり方を考えなければいけないと私は思うのです。やっぱり子どものときに教育を通じて、学校教育を通じて読書の世界をどんどん広げていくということは本当に重要だと思います。

私が子どものときに、自分のことばかり言って恐縮ですけれども、国語の教科書には本の一部が断片的に出ていますよね。それを読むとやっぱり全部読んでみたいなと思ったものです。それはやっぱり学校図書館に行って借りてきて読んでいました。買ったのもありますけれども。例えば、『『であること』と『すること』』という文章が教科書に載ってしまっていて、非常に読みやすい部分で教科書に載っているのですけれどもね。その原典である丸山真男の『日本の思想』を全部読もうと思ったら、全体はすごく難しい本で、途中で挫折しそうになりながら全部読みこなしたりしたことを今でも覚えています。当時学校では教科書に出ているのを原典に当たって全部読みたいなんていうのは、私だけではなかったのです。教師がそういうことを何か示唆するのですね。「これは、この本のごく一部なのだけど、全体を読むと面白いよ」というようなことを、学校の授業のときに、その本を持って来て示してくれるのですね。そうなると思えばぜひ挑戦してみたいなとやっぱり思ったものでした。

ですから教科書に出ている大概のものは夏休みの期間も含めて当時読んでいました。それはもちろん全員ではないし、ただ私だけでもなかったです。何人かの生徒はそういう習慣を持っていましたね。それは今振り返ると本当にありがたいことだったと思います。そういう動機付けをしてくれたということを教師に感謝します。日々の授業でそういうことを今もやっていただいたら、子どもたちに与える影響というのは違ってくるのではないかなと思います。

## 学校図書館

学校図書館、これも重要です。さっき私は話を伺ってびっくりしました。新潟市は小中学校が170校あって、正規であるかどうかはともかくとして全部司書さんがいるということを知って、これは本当に珍しいです。私が鳥取県知事の際に学校図書館に行ってみると、いろいろありまして、司書さんがいる所もあるしいない所もあったのです。暗い所もあるし非常に明るい所もあって、もう千差万別でした。総じて人がいる所はいきいきとしていました。その印象があるものから、それから東京で子育てをしていた頃、小学校では学校図書館に司書がいなかった。ところが、鳥取県のある所に行くという。それで違いがよく分かるわけです。一人の親としても違いが分かるわけです。

そんなこともあって鳥取県内の市町村長さんたちに、「学校図書館に司書をおきましょうよ。教育効果が出るから」と勧めました。「いや知事さん、それは分かるけれども先立つものがなくてね」というのがだいたいそれに対する応えでした。市町村長さんは挨拶代わりなのです、「いや、お金がありません」って。かつて大阪の人が挨拶代わりに「儲かりまっか」というと聞いていましたが、それと同じで、人の顔を見たら「いや財政が厳しくて」と、これが口癖でした。でも、金がまったく無いわけではないのです。どこかに使っているのですよ。ただ、学校図書館に使うお金が無いというだけです。

ということで、なかなか進みませんでしたけど、それでもやいやい言ったら、だいぶ進んできました。まだそんなに進んでいないときに、ある町長さんが「知事さん、そうやってわしらにやいやいと学校図書館に司書をおけると言われるが、あなたの所の県立高校はどうなのですか」と言われるのです。あ、そういえば見に行っていなかったと思って県立高校に見に行ったら、いやこれはだめだと思って、早速県の教育長に、学校図書館にちゃんと司書をきちんとおきましょうよと言いました。そうしたら教育長が、「そんなことをしていいんですか」と聞く。「なんで？」と問い返したら、「お金がかかりますよ」と言うから、「お金はどこかで私が工面しますから、ちゃんと計画を作ってください」と答えました。では、人を雇わなくてはいけないから、採用試験して、3年計画でやりますというので、全国に公募をかけて学校図書館司書を採用しました。50倍くらいの試験で、本当に北海道から九州まで応募がありました。

そのときに県立図書館の職員と学校図書館の職員と人事は同じにすることになりました。その人たちが県立図書館と高等学校の図書館とを行ったり来たりするというネットワークを作ったのですけれども、今、本当に大きな力になっています。大変大きな力で、鳥取県は県立図書館が非常に優れているということで表彰を受けました。ライブラリー・オブ・ザ・イヤ一賞というのをもらったのです。もらったのですが、実はそれは県立図書館だけのことで

なくて、県立高校の司書さんたちと大きなネットワークができています。だから現場を経験した人がまた県立図書館にやってくる。県立図書館の司書がまた高校に行くなんていうことをやって、いろいろなことが今できているのです。

そういうことで、採用試験をやって 50 倍の難関を突破した人たちがざっと配属されたら、あっという間に県立高校の図書館の様子が変わりました。私は従前従後を見に行っただけですけど、本当に生き生きとしてきたなと思いました。行ったらすぐに分かります。何でこんなに違うのだろうかということ踏まえて、また市町村長さんに話をし、「人を置いたら変わりますよ。嘘だと思えば県立高校に見に行っただらいいよ」と言ったら、論より証拠。鳥取県では当時 94、95 パーセントの小中学校において、学校図書館のスタッフが何らかの形で配置されました。これは実は驚異的なことだったのです。神奈川県はゼロでしたから。横浜市に 500 校、小・中学校がありますけどゼロです。私は本当かなと思って確かめに行きました。慶應大学日吉キャンパスがあるものですから、その近くの中学校にお邪魔したのです。校長先生が出てきてくれて、学校図書館を案内してもらったのです。聞いたのです。「司書さんは？」と言ったら、「いません」と。「今日はお休みですか？」と聞いたら、「いや、うちにはいないのです」と。「何でいないのですか？ 市の教育委員会に話をし配属してもらったらいいじゃないですか」と言ったら、校長先生が、「横浜市には一人もいません」ときっぱりおっしゃっていたのが印象的でした。何でそんなことをきっぱり言うのだろうと思いましたけどね。川崎市にもいません。そんなときに、財政的にはっても貧弱な鳥取県では 90 数パーセント置いたのだから、県内の市町村もよく頑張ってくれたものだ感謝していました。

そうしたら、お隣の島根県。失礼ですけども、鳥取県と同じように貧乏県です。島根県の知事さんは溝口さんと言われるのですが、地味だけど立派な人なのです。3 年前か 4 年前から、「よし小中学校の学校図書館に司書を置こう。そのための経費の半分を県が出してあげます」という政策を始めたのですね。人が必ずいる学校図書館にしようという政策で、以来、司書がどんどん増えて昨年度で 99 パーセントになったと聞いています。これはたいしたものだと私も思います。脱帽しました。もう鳥取県を抜きましたからね。だけど今日来たら、新潟市は 100 パーセントだということですから、これは大変なことですね。立派なことだと思います。

それくらいやはり学校図書館に力を入れておられる、そういう市があるということ私、今日知りまして来て良かったなと思いました。ぜひ、こういういい政策はこれからも続けていただきたい。続けていただくとするのは、実は東京都は都立高校には司書さんが配置されていたんですけど、それを今どんどんはがしているのです。それでオリンピック誘致もないものだと思うのですけれど。ですから、新潟市ではぜひ続けていただけて、全国のモデルとなるような学校教育、学校図書館行政にしていだければと思います。

## 公共図書館と子どもたち

もう時間もなくなりましたから急ぎますが、公共図書館、これも子どもたちにとっては非常に重要です。どうも日本は子どもを公共図書館に寄せ付けない風潮があります。子どもがせっかく自習をしようと思ってやって来たら、自習する人はだめだと。本を利用する人だけという、そんな傾向はありませんか。だけど折角子どもが勉強しようと思って向学心に燃えて来たのを追い出すこともないとは思うのですけれど。いやまあ、それでは示しがつかないとか、本を読もうとする人のスペースを奪うとか、いろいろ理由があって、それは分からないでもないですけれど、自習をしようとする子どもであっても、きちんと受け入れられる体制を大人はつくってあげるべきだと思うのですね。それを排除して、では、子どもはどこへ行けばいいのですか。盛り場に遊びに行ったほうがいいのですか、ということではないと思います。

この辺はなかなか難しいところかもしれませんが、子どもたちをもっと公共図書館に結びつけることはとても大切なことだと思います。だって将来の大人ですから。公共図書館の将来のクライアントなのです。その子どもたちが公共図書館に馴染むような環境をつくってあげるといのは大人の責務だと思うのです。

ヨーロッパを見ますといろいろな工夫をしています。例えば、デンマークでは宿題レファレンスをやってあげている公共図書館もあるそうです。子どもにもちゃんとレファレンスしてあげて、レファレンスというのは相談があったら、その相談に答えてあげる。例えば「こんな情報欲しいんですけど」と言ったら、「こことここにありますよ」とリストを見せてあげるとか、これがレファレンスでしょうけれども、子どもが「こんな宿題でちょっと困っているんですけど」と言ったら、解いてあげることはできません。そうではなくて「こんな本を読んでみれば？」とか、「こういうところにヒントがあるのではないの」ということをデンマークではやっているのだそうです。そうすると、子どもはまず図書館を端緒にして、図書館でヒントを得てそこから調べ学習をする。もちろん学校図書館でやってもいいのですけれども、公共図書館にはスタッフがちゃんと揃っていますから、子ども向けにもきちんとやってあげるといことです。

今、私の孫娘は母親も働いているものですから、放課後児童教室にお世話になっているのですが、あんなのも本当なら図書館でやったらいいのになと思ったりします。本が好きな子だったら図書館に入れておけば勝手に本を読むわけです。手間がかからないのです。本が嫌いで落ち着きのない子は図書館の別室に集めて、そこでできるだけ本に馴染むように仕向けてあげて、そのうちにその子たちが本好きになったら、しめしめじゃないですか。何もどこかに放課後教室を新たに作らなくても、図書館をちょっと広めにしておいて本好きな子は閲覧室、そうでない子は別の部屋でできるだけ本に親しめる環境を作ってあげる、ということをしてもいいので

はないかなと思います。

公共図書館と学校図書館が私はずっと連携をしたほうがいいと思います。日本はそれが少ないと思います。それをぜひやりたいというのが鳥取県では、県立高校と県立図書館とを一つのネットワークにしました。同じそれを一つのビジネスモデルとして特に市なんかにもお願いをして、市立図書館と市の学校図書館との間をずっと連携をして、司書さんたちもきちんと置いての前提ですけど、人事交流をして学校教育の中での読書教育と市の公共図書館との間で蔵書のやり取りとか情報の共有とか、そういうことをやったらどうかということなのです。こんなこともぜひやっていただけたらと思います。

## まちの本屋さん

あと重要なのは、まちの本屋さんです。子どもたちにとっても重要です。大人にとっても重要です。今、その本屋さん苦境に立たされています。東京辺りでもどんどん本屋さんが無くなる。この間まであったと思うのに、もう無くなるのです。それはなぜかという、少子化だとか言いますが、やっぱり本を読まなくなっているのです。もっともっと本屋に行って本を買うということも重要です。図書館を充実すると本屋が寂れるとよく言われるのですが、そうであってはいけません。図書館で本を読む、借りる。そこで触発されて本屋さんで自分のマイブックを買って、私なんかはマイブックを買ってマーカーを引いたり、書き込みをしたりしますから、そういう場合には図書館の本は使えないのです。図書館でももちろん本を借りて読みますが、ただ自分の本は自分の本で買って、しっかり自分で書き込みをしたりします。

ぜひ、まちの本屋さんにも注目していただいて、本屋さんで本を買う。もし本屋さんが無くなったらどうしますか。まちから本屋さんが消えたら。私なんかは困りますね。本屋さんが好きなのです。ちょっと待ち時間があって時間がちょっと余っているなと思ったら、だいたい本屋さんに行きます。そこで本を読んでいい本があったら買います。買わないこともありますけれども、本屋さんが大好きなのです。本屋さんて素っ気ないじゃないですか。店員さんが声を掛けてくれないし。洋服屋なんかに行ったら「お似合いですよ。これいかがですか」とかしくく言ってきますけれど、本屋さんは絶対言わないですね。「お客さんにはこの本がお似合いですよ」とか「この本はお買い得ですよ」などと言わないです。あの素っ気なさが大好きなのです。アメリカで本屋さんが無くなって、困っているところがありまして、これ新聞社のアメリカに行っていた人に聞いたのですが、まちから本屋さんが無くなるというので、みんなでお金を出し合って本屋をつくらうということになったそうです。それは本屋さんが無くなったならみんなが困るからです。

日本で昔、無医村というのがあって、お医者さんがいなくなったら困るということで、それで村が診療所をつくったわけです。そこのお医者さんが足りないから自治体が共同して自治医科大学というのをつくったのです。そうやって、全国、新潟なんかも多いのですが、医者を配属して無医村を無くそうということをやったのですが、同じように本屋さんがバタバタ無くなって、このまちには本屋さんが無いなんていうことになったら大変なことなのです。ぜひ皆さんで本屋さんを支えたら変ですけども、日常の生活習慣として本屋さんに行つて必要な本は自分で買うということもやっていただきたいと思うのです。そのときに子どもを連れて行って、その子どもが本屋さんで自分の好きな本を見付けられる、そういう生活習慣を小さいときから身につけておくということが重要だろうと思います。

## 学校図書館への新たな国の支援

最後になりましたけれども、先ほど市長さんにもお話いただきましたが、私は総務大臣になったときに、「何年続くかな、この内閣は」と思いました。知事のときは8年の計画をつくって仕事を段取りよくやったのですが、この内閣は何年続くかな、1年かな、まごまごしていると1年だろうなと思って、よし、やるべきことは早くやろうというので、本来の総務省というか自治体に関係する仕事でやりたいことを、例えばややこしいのですが、地方債発行に対する関与なんていうのはもっと簡便にして、あまり手間暇かからないようにしようということを決断してやりたいと思っていましたので、その改革に直ちに着手しました。

もう一つは、図書館。これは従来総務省なんていうのは、図書館とか学校図書館は文科省の仕事だ、総務省は関係無いと言っていたのです。だけど学校図書館も公共図書館も全部自治体の仕事なのです。だったら自治体を総合的に支援する総務省がもっとそこに乗り出してもいいのではないかと私は思っていたものですから、総務省の官僚の人たちに「もっと学校図書館とかを応援する仕組みをつくらうよ」と指示しました。当初は「えー」とか言っていましたけど、「考えてみたらそうですね」となり、そう言われてみればすべて「自治体の仕事ですね」ということになって、そこからだんだん官僚の人たちも変わってくれました。

従来の総務省の自治体支援策というのは、交付税をどんと配るというのはあるのですが、地域振興という面では、例えばイベントとか観光振興とか特産品の奨励とか、そういうことが多かったのです。そういうのをやると特別交付税を増やしてあげますとか、どちらかというと体育会系の支援が多かったのです。それもいいけどもっと知的な分野の支援もしようよということで、「知の地域づくり」を省内に広めました。今、総務省は「知の蓄積による地域づくり」とか言っていますけれども、そういうことに乗り出そうということになり、私は途中で退任し

ましたけども、あとの川端総務大臣に「これだけはお願いしますよ、私は外からずっと見ていますからね」と言ったら、ちゃんとやってくれまして、今年度から知の地域づくり、特に学校図書館の充実のために地方財政が力を果たすことになりました。

ですから、ぜひ全国の自治体で学校図書館とか公共図書館の充実にさらに努めていただければと思います。学校図書館には新潟市なんかから見たら本当に序の口ですけども、司書を置こうねというところから始めようとしています。学校図書館に司書を置きましょうねと。ここは100パーセント置いているから、さらに質的な向上を図るとか処遇の改善を図るという課題がまだまだあると思いますけれども、しかし少なくとも全部置かれている。だけど、国の施策では現段階ではとにかく置きましょうよというところから、今よちよちスタートするのです。

でも、そういう第一歩も始まりました。あとは蔵書をちゃんと充実させましょうねとか、学校に新聞を配備して、新聞を通じて学校教育をやっていきましょうねなんていうこともできるようにするということが今年度から始まりました。これからずっと続くと思いますから、ぜひ新潟市もそれを利用していただいて、子どもたちの読書環境を学校図書館でもさらに充実させていただければと思っています。

私の一方的な話はここまでにしておきます。あとで市長さんなどと一緒にまたここで第2部でも登場させていただきますので、そのときにまた足りなかったところはお話したいと思いません。時間も超過してしまいまして失礼しました。ご清聴ありがとうございました。

(司 会)

片山善博さん、ご講演ありがとうございました。興味深い話、楽しい話を交えながら、読書の大切さについてお話いただきました。

講師の片山さんにご質問のあるかたは、お手元の意見質問用紙に記入の上、休憩時間中に会場にいるスタッフにお渡しいただくか、ロビーにあります回収箱に入れてくださいますようお願いいたします。

質問には第2部の中で片山さんにお答えいただきますが、時間の都合で質問すべてにお答えいただくことができないことをご了承ください。

これより15分の休憩に入ります。第2部は2時50分から開始いたします。